

## 第Ⅱ編 想定地震と被害予測手法

### 1. 想定地震（モデル設定、調査単位等）

#### 1.1 想定地震

##### (1) 想定地震の設定

令和6年度に実施した海域活断層予備調査（地震動予測）では、地震調査研究推進本部（以下、「地震本部」）による「日本海南西部の海域活断層」の被害想定調査の必要性を判断する目的で、日本海南西部の海域活断層（西部）の9断層を対象に簡便法によって地震動想定と津波浸水想定を実施した。地震動の想定結果を用いて震度階級別の曝露人口を整理した結果、「小呂島近海断層帯 北西沖区間+東方沖区間」で震度6弱以上の曝露人口が最も多く、震度6弱以上が約68万人、震度6強以上が約1万7千人であった。

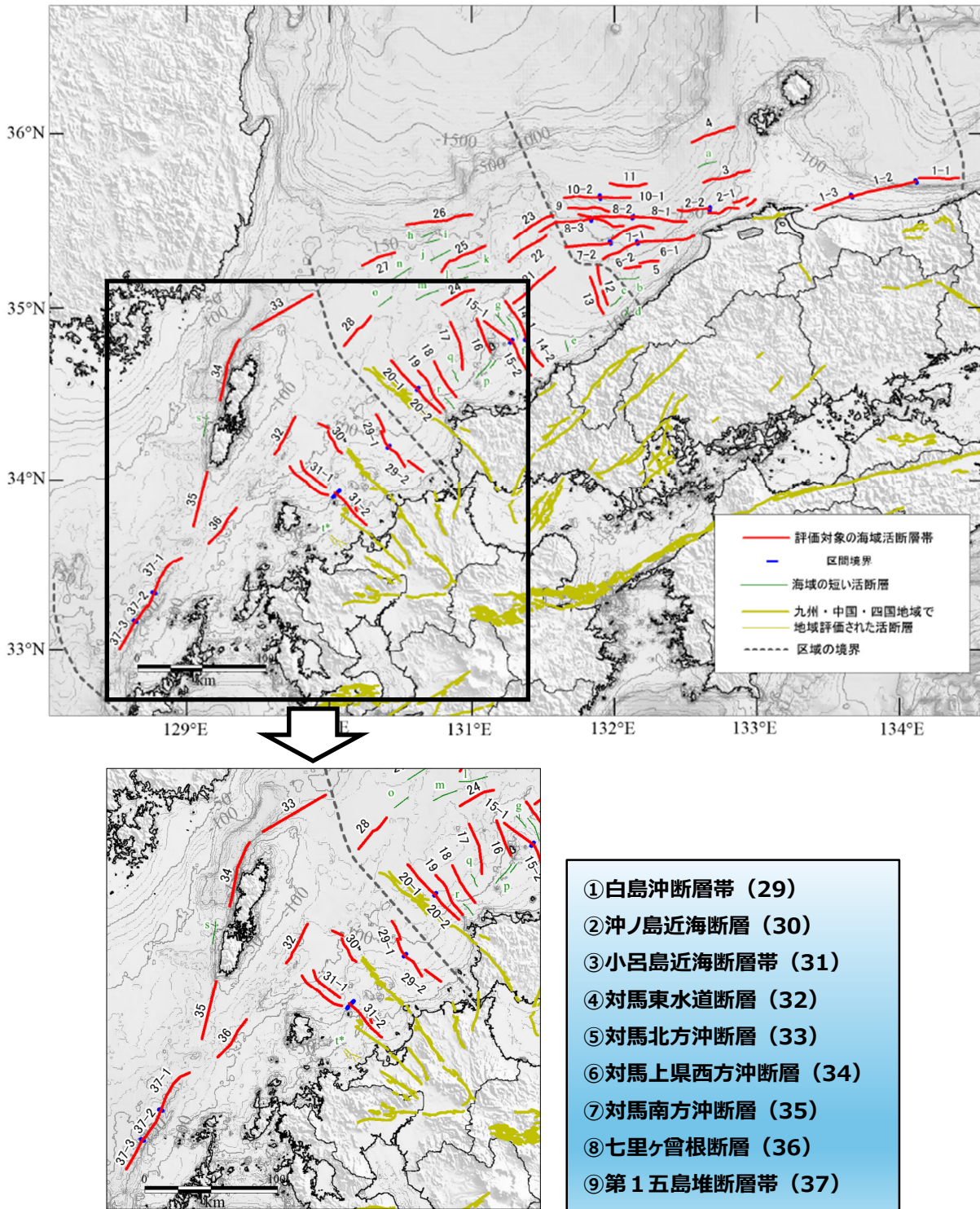
震度6弱以上の地点（メッシュ）の割合や曝露人口から、最大の被害をもたらすと想定される「小呂島近海断層帯 北西沖区間+東方沖区間」による地震については、福岡県内で一定以上の被害が見込まれることから、被害想定調査（建物被害、人的被害等）を実施する必要性が高いものとして、本調査の想定地震として位置付けた。

表Ⅱ.1-1 海域活断層予備調査による対象地震ごとの震度階級別曝露人口

対象断層	対象区間	震度階級別曝露人口（人）	
		6弱以上	6強以上
白島沖断層帯	北部区間	-	-
	南部区間	10,536	-
	北部区間+南部区間	42,150	879
小呂島近海断層帯	北西沖区間	158	-
	東方沖区間	32,551	-
	北西沖区間+東方沖区間	680,516	17,040
他の海域活断層	-	-	-

※人口データは令和2年国勢調査を使用

第Ⅱ編 想定地震と被害予測手法  
 1. 想定地震(モデル設定、調査単位等)



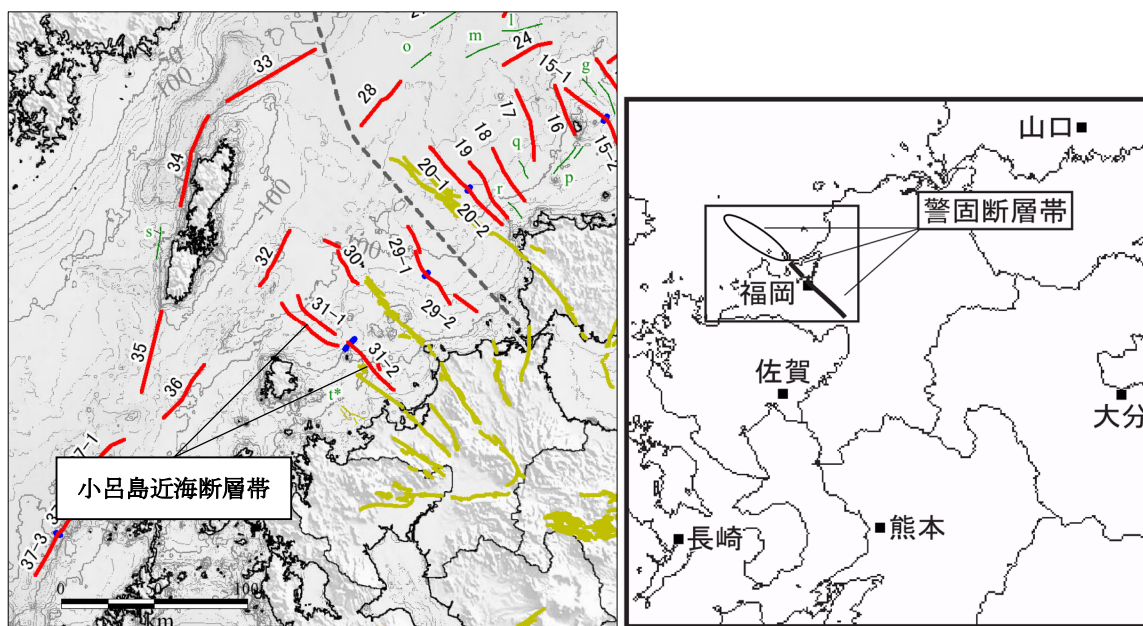
図Ⅱ.1-1 日本海南西部(評価対象海域)における評価対象の  
 海域活断層帯と海域の短い活断層の分布

※地震一覧の括弧内の数字は左図の番号に対応  
 (地震調査研究推進本部「日本海南西部の海域活断層の長期評価(第一版)―九州地域・中国地域北方沖―  
 (令和4年3月25日)」を基に作成)

小呂島近海断層帯については、地震本部による「日本海南西部の海域活断層の長期評価（第一版）—九州地域・中国地域北方沖—（令和4年3月25日）」（以下、「海域活断層の長期評価」という。）において、R6年度防災アセス調査で想定地震のひとつとした警固断層帯との関連が次のように記述されている。

注5：小呂島近海断層帯は、警固断層帯の海域延長部周辺に位置しており、警固断層帯と近接しているため、一連の活断層帯である可能性を否定できない。今後の調査研究によっては、東方沖区間及び北西沖区間は、警固断層帯を構成する区間になる可能性もある。

そこで、本調査では小呂島近海断層帯と警固断層帯が一連の断層帯であると仮定して、同時に活動する場合もあわせて検討するものとした。警固断層帯は北西部と南東部に分類されているが、北西部については2005年福岡県西方沖地震において固有地震が生じ、断層帯の応力が解放されたことから将来的な地震発生の可能性が低いものとして対象外とした。よって、本調査では小呂島近海断層帯と警固断層帯南東部の連動を想定地震のひとつとして取り扱う。



図Ⅱ.1-2 小呂島近海断層帯と警固断層帯の位置関係

(左図：海域活断層の長期評価を基に作成)  
(右図：地震調査研究推進本部「警固（けご）断層帯の長期評価について（平成19年3月19日）」より抜粋)

## 第Ⅱ編 想定地震と被害予測手法

### 1. 想定地震(モデル設定、調査単位等)

#### (2) 想定地震モデルとパラメータの設定

地震動を計算するために、震源となる断層の位置や大きさ(幅、長さ)、破壊伝播速度、破壊形式、破壊開始点(破壊方向)等のパラメータを整理し、強震断層モデル(震源モデル)を設定した。

活断層による地震の強震断層モデルは、令和2年3月に地震本部が断層パラメータを推定する手続きを系統的にまとめた「震源断層を特定した地震の強震動予測手法(「レシピ」)(以下、「レシピ」という。)」に沿って特性化震源モデル\*を作成した。

小呂島近海断層帯の震源モデルの位置は、海域活断層の長期評価(令和7年10月訂正(令和4年4月公表))の海域活断層の長期評価を踏まえて設定した。断層帯の長さ、水平上の向き(走向)、地中での傾き(傾斜角)及び断層面の相対的なすべりの向きは長期評価における物理探査を基に推定されているものを基本とした(表Ⅱ.1-3 参照)。想定地震モデルの位置は断層トレースを参考に図Ⅱ.1-3のように設定した。破壊開始点の位置については、経験的に県内の揺れが大きくなるような設定とした。具体的には、県の陸域へ向かって断層の破壊が伝播するように、小呂島近海断層帯の北端付近とする。ただし、破壊開始点の位置は不確実性が高いことから、小呂島近海断層帯の中央付近に設定した場合も想定し、これらをケース1、ケース2とした。

警固断層帯南東部については地震本部によって長期評価に基づいた想定地震モデルが示されているため、本調査ではこれを用いた。小呂島近海断層帯と警固断層帯南東部が連動する際の破壊開始点は前述の考えに則って小呂島近海断層帯の北端付近とし、これをケース3とした。想定震源(断層)の位置は図Ⅱ.1-4のとおりである。なお、ケース3は断層帯の総延長が86kmとやや長いことから、レシピによる通常の手順ではアスペリティ面積比が36%となり、内陸地震による面積比の割合(15~27%(宮腰・他(2001)))を大きく超える。一方、Sommerville et al. (1999)によると、震源断層全体の面積に対するアスペリティの総面積の比率が約22%と推定しているため、ここでは、面積比を22%に固定した長大断層の震源パラメータ設定方法を採用した。さらに、警固断層帯南東部のアスペリティの数は、R6年度アセスメント調査において震度7となる市区町村が多いことを根拠に1つとした。

なお、地震本部による各断層帯の長期評価では、下表のとおり上端深さについて両断層とも0kmと示されている。ただし、レシピによる震源断層モデルでは、微小地震の発生深さを考慮して、2~4km程度で震源モデルの上端深さを設定するものとしている。本調査においては、警固断層帯南東部はR6年度アセスメント調査との整合を図るために、既存の震源断層モデル(上端深さ2km)を採用した。小呂島近海断層帯についても同様のモデル化方法が考えられるものの、海域活断層の長期評価で用いた反射法の結果について課題を挙げられていることや、県内での揺れが大きくなるような設定として、令和6年度に実施した海域活断層予備調査と同様に上端深さを浅く(0km)設定した。

\* 特性化震源モデルとは、強震動を再現するために必要な震源の特性を主要なパラメータで表したもので、ここでは震源断層面は矩形状に表現される。レシピによると、特性化震源モデルの設定では、断層全体の形状や規模を示す巨視的震源特性、主として、震源断層の不均質特性を示す微視的震源特性、破壊過程を示すその他の震源特性、という3つの震源特性を考慮して震源特性パラメータを設定する。

表Ⅱ.1-2 海域活断層の長期評価における小呂島近海断層帯と警固断層帯南東部の  
上端深さに関する記述

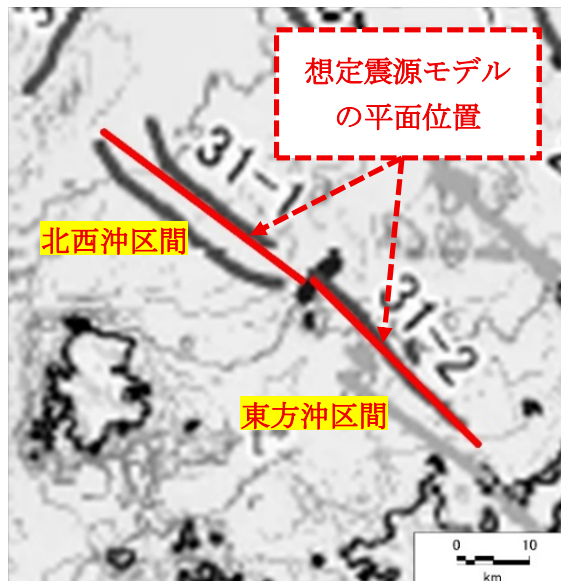
<p>■小呂島近海断層帯</p> <p>評価対象の海域活断層帯の多くは、反射断面の浅部（海底直下）において変位が認められていることから、全ての評価対象の海域活断層帯について、断層の上端の深さはほぼ0 kmとした。</p> <p>■警固断層帯南東部</p> <p>断層面上の上端の深さは、断層による変位が地表まで及んでいることから0 kmとした。</p>
--

設定したケース1～3の断層パラメータと断層面上のアスペリティ及び破壊開始点位置を表Ⅱ.1-5、表Ⅱ.1-6、図Ⅱ.1-5 図Ⅱ.1-6に、福岡県との位置関係を図Ⅱ.1-7に示す。

表Ⅱ.1-3 評価対象の海域活断層帯の特性

地域 細分	活断層のくくり (付録2)	評価単位 区間(付録2)	断層長 (km)	信頼 度	各区間単独活 動の場合の地 震規模(M)	ずれの向きと種類			断層面の 傾斜方向	信頼 度	断層面 の幅 <sup>注7)</sup>	基準面の垂 直変位量 <sup>注8)</sup> (sec)	信頼 度	1回の ずれ量 <sup>注9)</sup>	
						断層の 走向 <sup>注6)</sup>	種類	信頼 度							
西 部	白島沖断層帯	北部	22	○	7.1程度	S24° E	左横ずれ	○	ほぼ垂直	○	15km程度	0.01	▲	2m程度	
		南部	27	○	7.2程度	S52° E	左横ずれ	○	ほぼ垂直	△	15km程度	不詳	—	3m程度	
		全体	48	○	7.6程度										
	沖ノ島近海断層 <sup>注4)</sup>		24	○	7.1程度	S40° E	左横ずれ	○	ほぼ垂直	△	15km程度	0.02	▲	2m程度	
	西山断層帯 <sup>注10)</sup>	西山断層帯の長期評価（一部改訂）（地震調査研究推進本部地震調査委員会，2013b）を参照													
	小呂島 近海断層帯 <sup>注5)</sup>	北西沖	31	○	7.3程度	S53° E	左横ずれ	○	ほぼ垂直	○	15km程度	0.02	▲	3m程度	
		東方沖	28	○	7.2程度	S45° E	左横ずれ	○	ほぼ垂直	△	15km程度	0.02	▲	3m程度	
		全体	63	○	7.8程度										
	警固断層帯 <sup>注10)</sup>	警固断層帯の長期評価（地震調査研究推進本部地震調査委員会，2007）を参照													
	対馬東水道断層	27	○	7.2程度	N27° E	右横ずれ	○	東南傾斜中角	○	21km程度	0.02	▲	3m程度		
	対馬北方沖断層	45以上	△	7.6程度以上	N61° E	右横ずれ	○	ほぼ垂直	○	15km程度	0.02	△	5m程度以上		
	対馬上県西方沖断層	41	△	7.5程度	N17° E	右横ずれ	○	ほぼ垂直	△	15km程度	不詳	—	4m程度		
	対馬南方沖断層	36	△	7.4程度	N12° E	右横ずれ	○	東傾斜中角	○	21km程度	不詳	—	4m程度		
	七里ヶ曾根断層	29	△	7.3程度	N40° E	右横ずれ	○	ほぼ垂直	○	15km程度	不詳	—	3m程度		
	第1五島堆断層帯	北部	29	△	7.3程度	N35° E	右横ずれ	○	南東傾斜高角	△	17km程度	不詳	—	3m程度	
中部		22	△	7.1程度	N40° E	右横ずれ	○	南東傾斜高角	△	17km程度	不詳	—	2m程度		
南部		22	△	7.1程度	N25° E	右横ずれ	○	南東傾斜高角	△	17km程度	不詳	—	2m程度		
全体		73	△	7.9程度											

(出典：地震調査研究推進本部「日本海南西部の海域活断層の長期評価（第一版）—九州地域・中国地域北方沖—（令和4年3月25日）」）



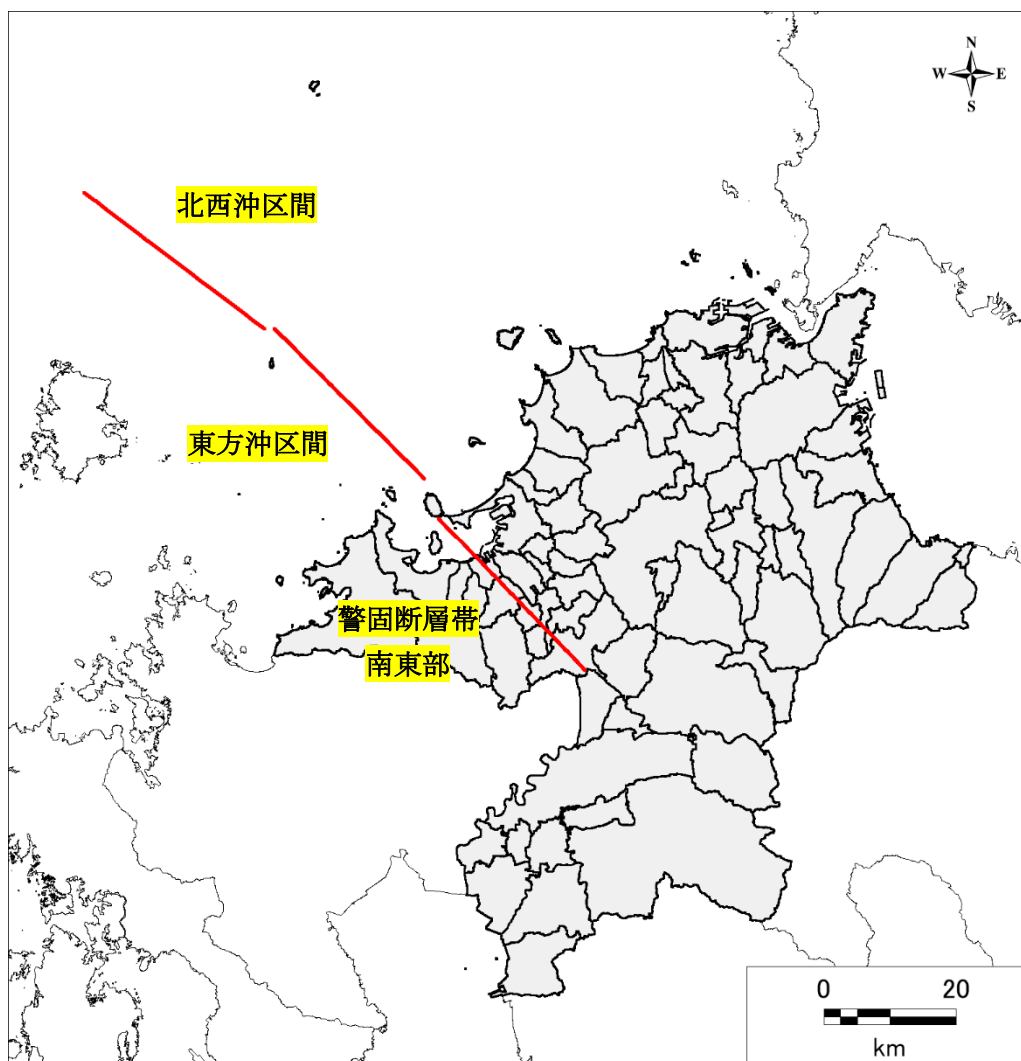
図Ⅱ.1-3 海域活断層の長期評価による断層トレースと想定震源モデルの設定  
(地震調査研究推進本部「日本海南西部の海域活断層の長期評価（第一版）—九州地域・中国地域北方沖—（令和4年3月25日）」に重ね書きして作成)

## 第Ⅱ編 想定地震と被害予測手法

### 1. 想定地震(モデル設定、調査単位等)

表Ⅱ.1-4 活断層型の想定地震一覧

番号	想定地震(断層)	破壊開始点
1	小呂島近海断層帯(北西沖+東方沖)	北側
2	〃	中央
3	小呂島近海断層帯(北西沖+東方沖) + 警固断層帯南東部	北側

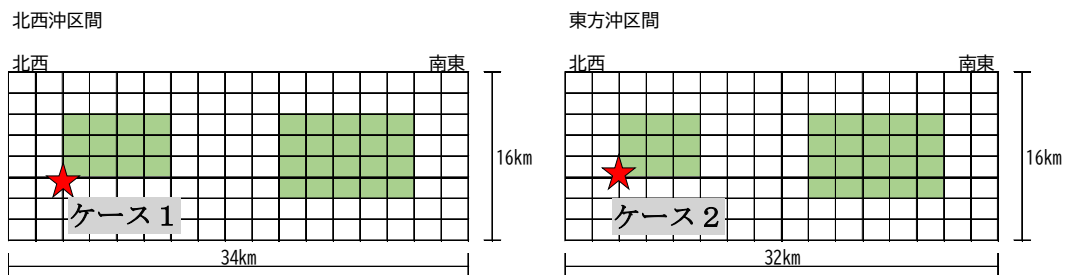


図Ⅱ.1-4 小呂島近海断層帯と警固断層帯南東部の震源モデル位置

第Ⅱ編 想定地震と被害予測手法  
1. 想定地震(モデル設定、調査単位等)

表Ⅱ.1-5 小呂島近海断層帯(ケース1、2)の震源断層パラメータ

巨視的震源パラメータ		設定値		
		北西沖区間	東方沖区間	
断層長さ	L	31 km	28 km	
マグニチュード	M	59 km 7.8		
走向	$\theta$	127 °	135 °	
傾斜角	$\delta$	90 °	90 °	
すべり角	$\gamma$	0 °	0 °	
断層モデル上端深さ	-	0 km	0 km	
単位区間モデル長さ	$L_{seg}$	34 km	32 km	
単位区間モデル幅	$W_{seg}$	16 km	16 km	
単位区間モデル面積	$S_{seg}$	544 km <sup>2</sup>	512 km <sup>2</sup>	
断層モデル面積	$S_{model}$	1056 km <sup>2</sup>		
地震モーメント	$M_0$	4.36E+19 Nm		
モーメントマグニチュード	$M_w$	7.0		
静的応力降下量	$\Delta\sigma$	4.0 MPa		
平均すべり量	$D_{model}$	1.58 m		
短周期レベル	A	1.86E+19 Nm/s <sup>2</sup>		
微視的震源パラメータ				
全アスペリティ	面積	$S_a$	243.3 km <sup>2</sup>	
	実行応力	$\sigma_a$	14.65 MPa	
	すべり量	$D_a$	3.15 m	
	地震モーメント	$M_{0a}$	2.40E+19 Nm	
アスペリティ1	面積	$S_{a1}$	85.2 km <sup>2</sup>	77.0 km <sup>2</sup>
	実行応力	$\sigma_{a1}$	14.65 MPa	14.65 MPa
	すべり量	$D_{a1}$	3.58 m	3.40 m
	地震モーメント	$M_{0a1}$	9.52E+18 Nm	8.17E+18 Nm
アスペリティ2	面積	$S_{a2}$	42.6 km <sup>2</sup>	38.5 km <sup>2</sup>
	実行応力	$\sigma_{a2}$	14.65 MPa	14.65 MPa
	すべり量	$D_{a2}$	2.53 m	2.41 m
	地震モーメント	$M_{0a2}$	3.37E+18 Nm	2.89E+18 Nm
背景領域	面積	$S_b$	337.2 km <sup>2</sup>	304.5 km <sup>2</sup>
	実行応力	$\sigma_b$	2.53 MPa	2.40 MPa
	すべり量	$D_b$	1.00 m	0.95 m
	地震モーメント	$M_{0b}$	1.06E+19 Nm	9.06E+18 Nm

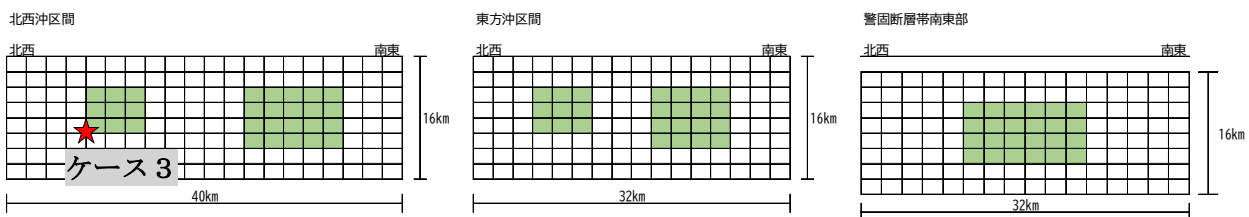


図Ⅱ.1-5 小呂島近海断層帯(ケース1、2) 断層面設定  
(□: 背景領域、■: アスペリティ、★: 破壊開始点)

第Ⅱ編 想定地震と被害予測手法  
1. 想定地震(モデル設定、調査単位等)

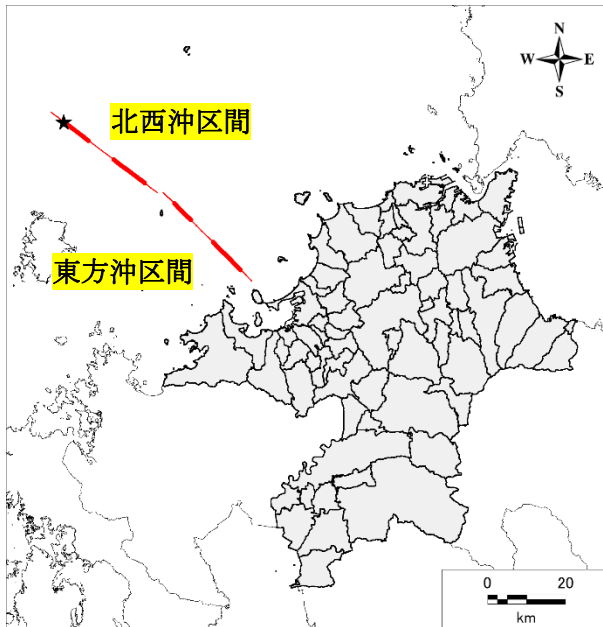
表Ⅱ.1-6 小呂島近海断層帯+警固断層帯南東部(ケース3)の震源断層パラメータ

巨視的震源パラメータ		設定値		
		北西沖区間	東方沖区間	警固断層帯南東部
断層長さ	L	31 km	28 km	27 km
マグニチュード	M		8.1	
走向	$\theta$	127 °	135 °	136 °
傾斜角	$\delta$	90 °	90 °	90 °
すべり角	$\gamma$	0 °	0 °	0 °
断層モデル上端深さ	-	0 km	0 km	2 km
単位区間モデル長さ	$L_{seg}$	34 km	32 km	32 km
単位区間モデル幅	$W_{seg}$	16 km	16 km	16 km
単位区間モデル面積	$S_{seg}$	544 km <sup>2</sup>	512 km <sup>2</sup>	512 km <sup>2</sup>
断層モデル面積	$S_{model}$		1317 km <sup>2</sup>	
地震モーメント	$M_0$		9.65E+19 Nm	
モーメントマグニチュード	$M_w$		7.3	
静的応力降下量	$\Delta\sigma$		3.1 MPa	
平均すべり量	$D_{model}$		2.35 m	
短周期レベル	A		2.43E+19 Nm/s <sup>2</sup>	
微視的震源パラメータ				
全アスペリティ	面積	$S_a$	289.74 km <sup>2</sup>	
	実行応力	$\sigma_a$	14.09 MPa	
	すべり量	$D_a$	4.69 m	
	地震モーメント	$M_{0a}$	4.25E+19 Nm	
アスペリティ1	面積	$S_{a1}$	68.2 km <sup>2</sup>	61.6 km <sup>2</sup>
	実行応力	$\sigma_{a1}$	14.09 MPa	14.09 MPa
	すべり量	$D_{a1}$	5.35 m	5.08 m
	地震モーメント	$M_{0a1}$	1.14E+19 Nm	9.78E+18 Nm
アスペリティ2	面積	$S_{a2}$	34.1 km <sup>2</sup>	30.8 km <sup>2</sup>
	実行応力	$\sigma_{a2}$	14.09 MPa	14.09 MPa
	すべり量	$D_{a2}$	3.78 m	3.60 m
	地震モーメント	$M_{0a2}$	4.03E+18 Nm	3.46E+18 Nm
背景領域	面積	$S_b$	362.7 km <sup>2</sup>	327.6 km <sup>2</sup>
	実行応力	$\sigma_b$	2.51 MPa	2.39 MPa
	すべり量	$D_b$	1.73 m	1.65 m
	地震モーメント	$M_{0b}$	1.96E+19 Nm	1.68E+19 Nm

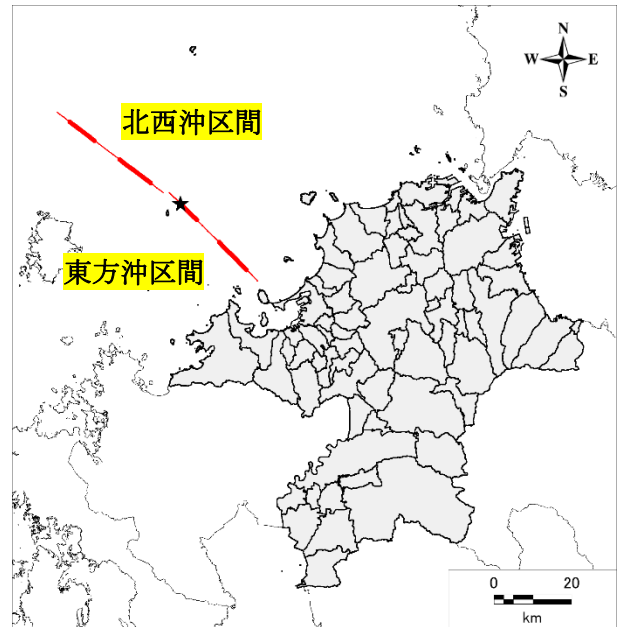


図Ⅱ.1-6 小呂島近海断層帯+警固断層帯南東部(ケース3)の断層面設定  
(□: 背景領域、■: アスペリティ、★: 破壊開始点)

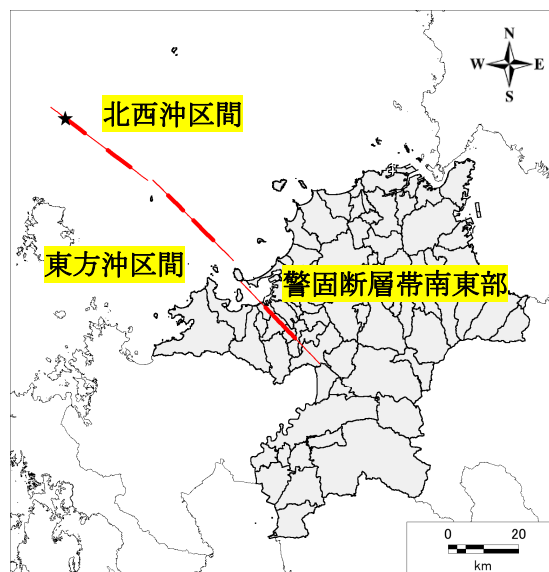
ケース 1



ケース 2



ケース 3



図Ⅱ.1-7 ケース1～3の震源設定位置  
(-:背景領域、-:アスペリティ、★:破壊開始点)

## 第Ⅱ編 想定地震と被害予測手法

### 1.想定地震(モデル設定、調査単位等)

#### (4) 想定地震毎の調査内容

本調査では、前節までに示したケース1～3の地震について地震動等の想定を行う。その結果を踏まえ、県内に最も影響の大きいと考えられるケースを対象に被害想定を行うものとした。

次章で示す地震動予測の結果、小呂島近海断層帯と警固断層帯南東部が同時に活動するケース3を被害想定の対象として取り扱うものとした。

表Ⅱ.1-7 想定地震ごとの調査内容

想定地震	地震動・液状化等の予測	被害想定
ケース1	○	
ケース2	○	
ケース3	○	○

**第Ⅱ編 想定地震と被害予測手法**  
**1.想定地震(モデル設定、調査単位等)**

**1.2 調査単位、調査範囲**

被害想定の評価単位は、R6年度防災アセス調査と同様に、一辺が約250m四方の標準地域メッシュ（以下、「250mメッシュ」という。）を使用した。また、調査の対象は本県全域で、メッシュ数は76,733メッシュである。

**表Ⅱ.1-8 標準地域メッシュの区分**

区画の種類	区分方法	緯度の 間隔	経度の 間隔	一辺の 長さ	地図との関係
第1次地域区画 (1次メッシュ)	全国の地域を偶数緯度及びその間隔(120分)を3等分した緯度における緯線並びに1度ごとの経線とによって分割してできる区域	40分	1度	約 80km	20万分の1地勢図の 1図葉の区画
第2次地域区画 (2次メッシュ)	第1次地域区画を緯線方向及び経線方向に8等分してできる区域	5分	7分 30秒	約 10km	2万5千分の1地勢 図の1図葉の区画
基準地域メッシュ (第3次地域区画)	第2次地域区画を緯線方向及び経線方向に10等分してできる区域	30秒	45秒	約 1km	
2分の1地域メッシュ (分割地域メッシュ)	基準地域メッシュ(第3次地域区画)を緯線方向、経線方向に2等分してできる区域	15秒	22.5 秒	約 500m	
4分の1地域メッシュ (分割地域メッシュ)	2分の1地域メッシュを緯線方向、経線方向に2等分してできる区域	7.5秒	11.25 秒	約 250m	地震被害想定に使用 したメッシュ
8分の1地域メッシュ (分割地域メッシュ)	4分の1地域メッシュを緯線方向、経線方向に2等分してできる区域	3.75秒	5.625 秒	約 125m	

※「総務省統計局」より引用、一部追記

**表Ⅱ.1-9 本調査の調査範囲とメッシュ数**

① 調査範囲	本県全域 面積 4,977 km <sup>2</sup>
② 市町村数	60 市町村 72 市区町村
③ メッシュ数	76,733 メッシュ

## 第Ⅱ編 想定地震と被害予測手法

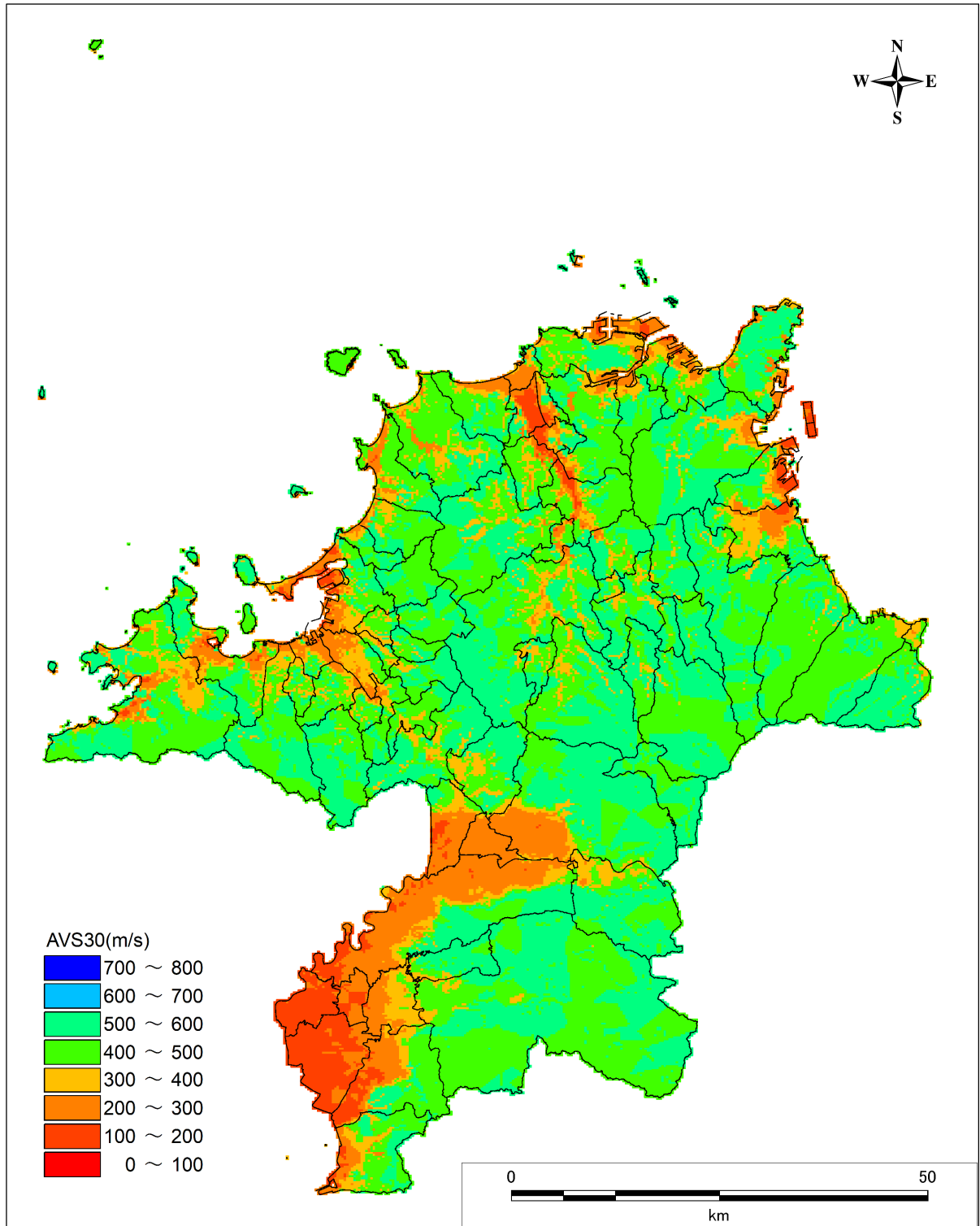
### 1. 想定地震(モデル設定、調査単位等)

#### 1.3 地盤モデル

##### (1) 表層地盤モデル

地表面付近の表層地盤は、R6年度防災アセス調査で設定した250mメッシュ単位のモデルを用いた。このモデルは、微地形区分(山、川、平野という大きな地形を、さらにその成り立ちや特徴によって細かく区分したもの)とボーリングデータによって再構築を行い、物性値(S波速度および単位体積重量)を与えることで作成したものである。また、土の材料特性を表す動的変形特性についても、R6年度防災アセス調査と同様とした。

一般に、地盤はS波速度が大きいほど硬質で、遅いほど軟弱である。表層地盤の揺れやすさを示す指標として多く用いられるAVS30(地表から深さ30mまでの平均S波速度)を図Ⅱ.1-8に示した。AVS30が小さいと軟弱な地盤であり、地震動が増幅するため揺れやすくなる。一方で、非常に強い揺れが伝わった場合には、土の特性(非線形性)によって、変形が大きくなるような揺れが生じることもある。福岡県内では、低地部や河川沿いなどでAVS30が200m/sとなる場所が多く確認できる。



図Ⅱ.1-8 地表から深さ30mまでの平均S波速度 (AVS30)

## 第Ⅱ編 想定地震と被害予測手法

### 1. 想定地震(モデル設定、調査単位等)

#### (2) 深部地盤モデルの設定

R6年度防災アセス調査ではJ-SHISによる計算データ(工学的基盤の地震動データ)を用いた。本調査で対象とする海域活断層はJ-SHISによる計算データが無い場合、深部地盤モデルを設定して工学的基盤の地震動を予測する必要がある。

深部地盤モデルはJ-SHISで公開されているモデル(J-SHISV4.0)を用いた。モデルは表Ⅱ.1-10の物性値を持つ層構造で整備されている。福岡県周辺の主要な速度層の深さ分布図を図Ⅱ.1-9、図Ⅱ.1-10に示した。

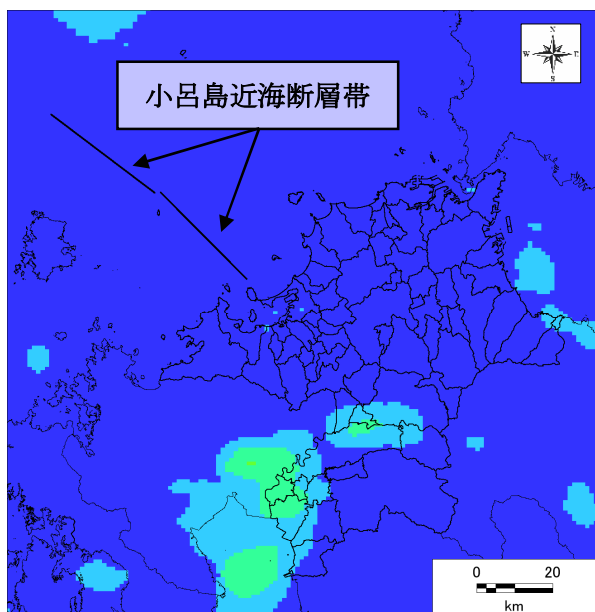
筑後平野～県東部ではS波速度( $V_s$ )600m/s層が100～600m程度分布していることが分かる。非常に硬質な地盤とされる地震基盤( $V_s$ 3000m/s以上層)は、響灘から遠賀川流域、福岡市の平野部でやや深くなっている。一般に、地震基盤が深いと、その上にS波速度が遅い層が厚く堆積していることから地盤による増幅が増え、深部地盤の最上面(工学的基盤面)での揺れが大きくなる。また、 $V_s$ が比較的遅い層が盆地状に堆積するような場所では、長周期成分を含む表面波が発生することで、周期的な特性や揺れの継続時間が、他の地点と比べて異なる特徴を持つことがある。

表Ⅱ.1-10 深部地盤モデルの物性値一覧

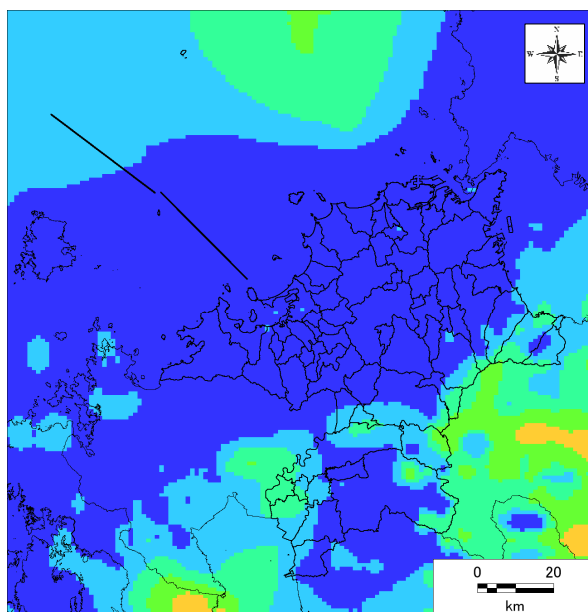
番号	P波速度 [m/s]	S波速度 [m/s]	密度 [g/cm <sup>3</sup> ]	Qp	Qs
1	1600	350	1850	60	60
2	1600	400	1850	60	60
3	1700	450	1900	60	60
4	1800	500	1900	60	60
5	1800	550	1900	60	60
6	2000	600	1900	100	100
7	2000	650	1950	100	100
8	2100	700	2000	100	100
9	2100	750	2000	100	100
10	2200	800	2000	100	100
11	2300	850	2050	100	100
12	2400	900	2050	100	100
13	2400	950	2100	100	100
14	2500	1000	2100	150	150
15	2500	1100	2150	150	150
16	2600	1200	2150	150	150
17	2700	1300	2200	150	150
18	3000	1400	2250	150	150
19	3200	1500	2250	150	150
20	3400	1600	2300	150	150
21	3500	1700	2300	150	150
22	3600	1800	2350	150	150
23	3700	1900	2350	150	150
24	3800	2000	2400	200	200
25	4000	2100	2400	200	200
26	4000	2100	2400	200	200
27	5000	2700	2500	200	200
28	4600	2900	2550	200	200
29	5000	2700	2500	200	200
30	5500	3100	2600	300	300
31	5500	3100	2600	300	300
32	5500	3200	2650	300	300

第Ⅱ編 想定地震と被害予測手法  
 1. 想定地震(モデル設定、調査単位等)

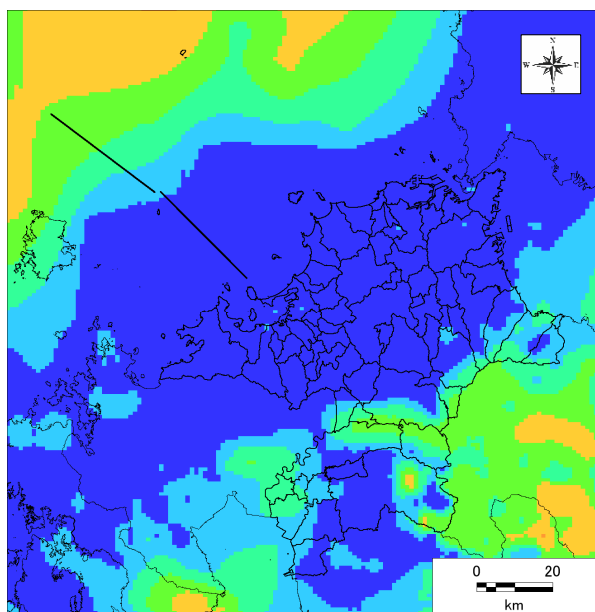
Vs600m/s 層下面深さ (Vs1100m/s 層上面深さ)



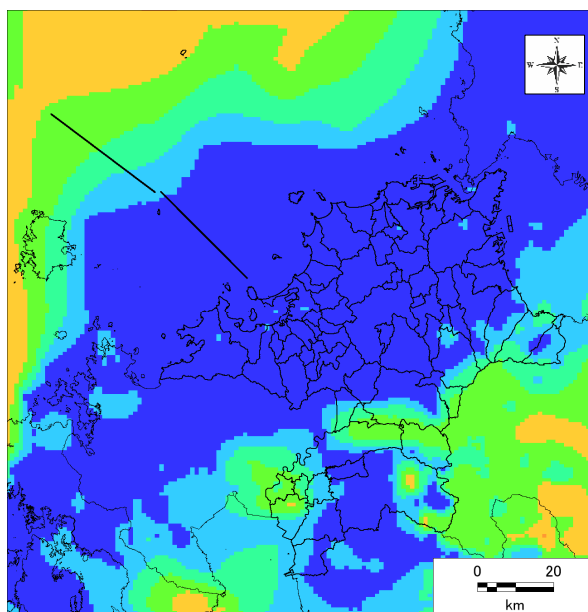
Vs1100m/s 層下面深さ (Vs1400m/s 層上面深さ)



Vs1400m/s 層下面深さ (Vs1700m/s 層上面深さ)



Vs1700m/s 層下面深さ (Vs2100m/s 層上面深さ)

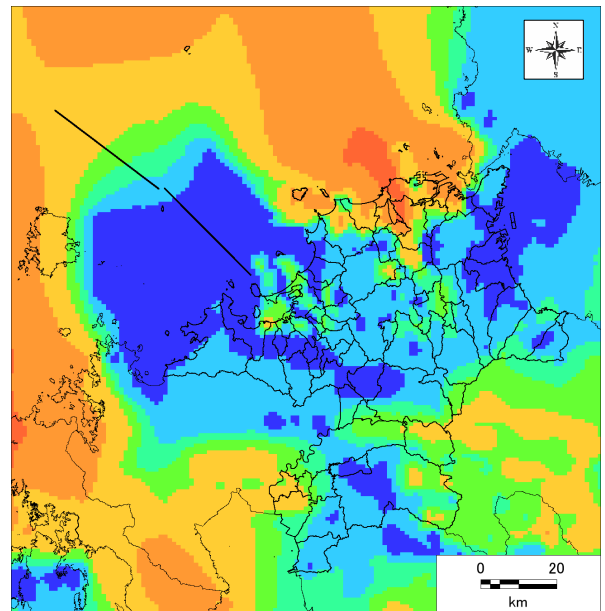
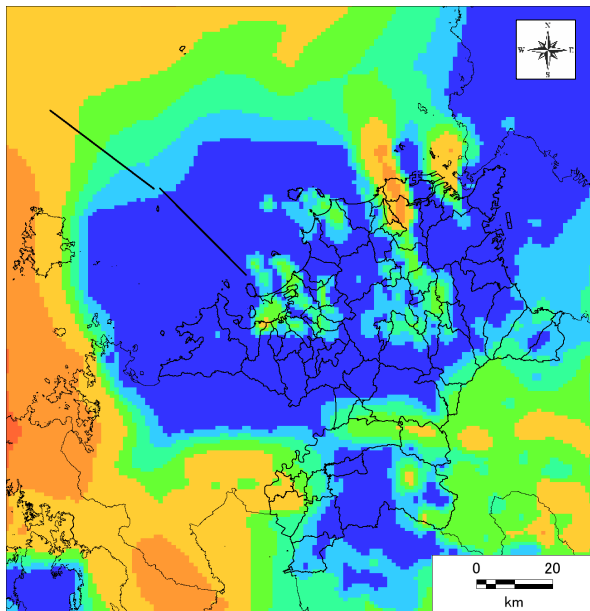


図Ⅱ.1-9 深部地盤による各層の深さ分布 (1/2)

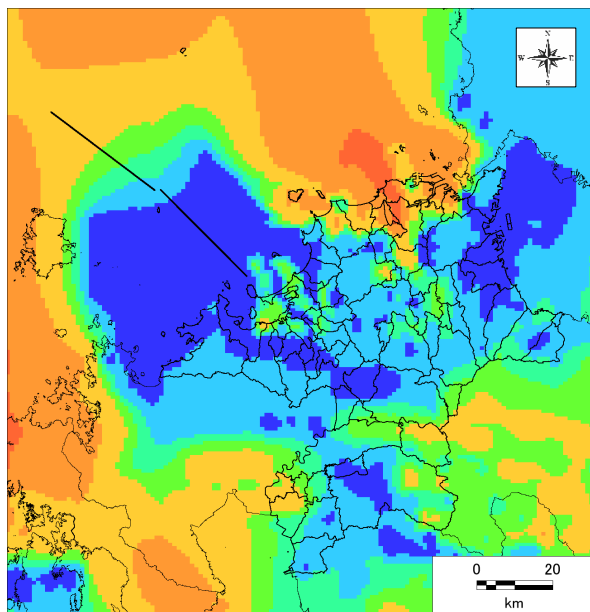
第Ⅱ編 想定地震と被害予測手法  
1. 想定地震(モデル設定、調査単位等)

Vs2100m/s 層下面深さ (Vs2700m/s 上面深さ)

Vs2700m/s 層下面深さ (Vs3100m/s 上面深さ)



(地震基盤深さ)



図Ⅱ. 1-10 深部地盤による各層の深さ分布 (2/2)